有彩の日記　無彩の日記

―『紫式部日記』の色彩と『讃岐典侍日記』の色彩―

阿部　絵里香

『讃岐典侍日記』は服飾・色彩に関する記述が極端に少ない。これとは逆に『紫式部日記』には極端に多い。『讃岐典侍日記』の服飾記述の少なさについて、小谷野純一氏[1]は

書きてじしんには、衣装への関心はなかったとおぼしく、後述のように、堀河帝が絡む場合にのみ、言及されるにとどまっているのだった。

と述べられている。確かに『讃岐典侍日記』の服飾に関する記述の少なさは、著者自身がその分野に興味がないからだと思われるほどである。しかし、その記述の少なさは本当に本人の興味の有無によるものだけなのだろうか。では、逆に記述の多い『紫式部日記』は本人の興味があるから記述が多いだけなのだろうか。服飾記述が多い『紫式部日記』と、服飾記述の少ない『讃岐典侍日記』の服飾と色彩に関する記述を見ることによって、それぞれの服飾や色彩に関する捉え方を改めて考えてみたい。

○

『紫式部日記』の著者・紫式部はその記述量の多さから考えて見ても、服飾や色彩に関して並々ならぬ関心を持っていた人物と考えられる。紫式部の服飾に関する関心の高さは『源氏物語』[2]に

着たまへるものどもをさへ言ひ立つるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひためれ。（末摘花）

とあることからも見てとれる。「昔物語にも人の御装束をこそ言ひためれ」と「こそ」という強意表現を使用しているこ

と、しかも「まづ」言うのだという姿勢を見ても、「人の御装束」というものを、極めて重視していたことは間違いないだろう。さらに、それら衣装のことを「言ひ立てる」のは「もの言ひさがなきやうなれど」と言いながら、末摘花の衣装に対し、

聴し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き袿重ねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着給へり。古体のゆへづきたる御装束なれど、なを若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしき事、もてはやされり。（末摘花）

というように「おどろおどろしき」までだと手厳しい評価を詳細に述べている。

この紫式部の持っている「他の人の装束」に対するこだわりは、『紫式部日記』[3]にも良く表れている。

その日の人の装束、いづれとなく尽くしたるを、袖口のあはひ悪う重ねたる人しも、「おまへの物取り入る」とて、そこらの上達部、殿上人にさし出でて、「まぼられつること」とぞ、のちに宰相の君など、口惜しがりたまふめりし。さるは、悪しくもはべらざりき。ただ、あはひのさめたるなり。（中略）織物ならぬを「悪し」とにや。それあながちのこと。顕証なるにしもこそ、とりあやまちのほの見えたらむ側目をも選らせたまふべけれ、衣の劣りまさりはいふべきことならず。

「衣の劣りまさりはいふべきことならず」などと言いながら、その悪かったと思われる理由について、「あはひのさめたるなり」「織物ならぬを『悪し』とにや」と何が具合が悪かったのかを批評し言及していることからも、単なる服飾好き以上のそのこだわりの強さを見ることができる。

更に『源氏物語』[4]では

こゝかしこの擣殿よりまいらせたる擣物ども御覧じくらべて、濃き赤など、さま〴〵を選らせ給つゝ、御衣櫃、衣箱どもに入させ給ふて、おとなびたるじやうらうどもさぶらひて、これはかれはと取り具しつゝ入。上も見給て、「いづれも劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを、着給はん人の御かたちに思よそへつゝたてまつれ給へかし。着たる物のさまに似ぬはひが〳〵しくもありかし」との給へば、おとゞうち笑ひて、「つれなくて、人の御かたちをしはからむの御心なめりな。さてはいづれをとかおぼす」と聞こえ給へば、「それも鏡にてはいかでか」と、さすがはぢらひておはす。（玉鬘）

とあるように、衣装から「人の御かたち」を「をしはか」ろうとしている紫の上の様子が描かれる。つまり、衣装は、己を飾ることができるだけのものではなく、そのセンスから他人の様子を推察するツールとして充分に使用できたということである。この考え方を見ると、紫式部が、日記上多くの女性たちの衣装を具に記載するその理由には、服飾センスが人物を推し量る一つの基準のように考えている部分があったからだと言えるのではないだろうか。事実、紫式部には、服飾に対するセンスはその人物そのものを表す一つの方向性のように捉えている節を見ることができる。

⑤うちとけたるおりこそ、まほならぬかたちも、うち混じりて見え分かれけれ、心を尽くしてつくろひ化粧じ、「劣らじ」としたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て、年のほどのおとなび、いと若きけぢめ、髪の少し衰へたるけしき、まだ盛りのこちたきがわきまへばかり、見わたさる。さては、扇より上の額つきぞ、あやしく、人のかたちを品々しくも、下りてももてなすところなめる。かかるなかに「すぐれたり」と見ゆるこそかぎりなきならめ。

ハレの状態では、皆が盛装しているため年齢の上下や髪の毛量の区別しかつかず、しかし、その中でも『「すぐれたり」と見ゆる』を良いとしている。年齢の上下と髪の量、扇より上の額つきしか人物の区別がつかないのだとすれば、その人物が「すぐれたり」と判断する基準は、盛装具合の良し悪しが左右していると見ているとよいであろう。

紫式部の服飾批評は、服飾だけに止まらず人物批評へとスライドしていく。消息体部分では具体的な人物名までも列挙し、それぞれに批評を加えている。

紫式部の人物批評の面白さは、それが単純な人物批評に終わらないところにある。

⑥かく、方々につけて、一ふしの思ひ出でらるべきことなくてすぐしはべりぬる人のことに行く末のたのみもなきこそ、慰め思ふ方だにはべらねど、「心すごうもてなす身ぞ」とだに思ひはべらじ。

他者への人物批評はそれだけで終了するのではなくて、全て自己を省みることへとつながっていくのである。

この紫式部の鋭い人物評には、衣類に関する強いこだわりと評価も一役買っているとみてよいだろう。衣装へのこだわりと人物評価が直に結びつくとは言えないが、鋭い観察眼や強いこだわり、服装が人物を表す一つの手段という彼女の考え方が、他者や自己に対する評価への一つの手がかりとなったということは間違いない。

もちろん、式部が人物評価をするためだけに、他者の服装

を注視していたとは考え難い。襲・色目・織・刺繍・摺り模様等、細かいディテールへのこだわりまで考慮すると、やはり彼女が衣装に対して強い関心を持っていたのは間違いない。

ここで興味深いのは、式部の服飾への興味は女性に限られていることである。男性の服飾に関しては、わずかに

御湯殿は、酉の時とか。火ともして、宮の下部、緑の衣の上に白き当色着て、御湯まゐる。

という記述が一例あるのみである。

そう考えてみると、「服装に人柄が現れる」という彼女の考え方は、実は、「人」ではなく「女性の」なのかもしれない。もちろん服装に全てが表れるのだなどと言う気は毛頭ない。しかし、ある意味では、彼女は女性の人柄は服飾に表れると考えていたのだろう。そして身分の上下を問わず女性に対して厳しい視線を持っていたことそのものは、それが自身を省みることにつながることを考慮すると、自分自身も「女」であるということを強く意識したことの表れだとも言える。

紫式部にとって、服装や色彩とは、自分の興味の対象であり、他者を批評するための一つの指標であり、それ故に反照的に「女」としての自分を強く意識させるものであり、己を省みるためのものであったのではないだろうか。

○

他方、『讃岐典侍日記』には、驚くほどに服飾・色彩の記述が少ない。上巻の天皇看取りの部分は、場所が病間であること、堀河帝が闘病中であったことから、華やかな色彩が少ないことは仕方がないとしても、下巻に関しては、彼女自身が参列した数多くの儀式のことも描かれているのである。

これらの服飾や色彩の記述の少なさは、勿論、彼女がどんなに服飾関係に興味がなかったのかということを示している。しかし、別の見方をすれば、彼女の作品世界には色彩は必要なかったのだと見ることもできるのではないだろうか。

『讃岐典侍日記』四十四段中、確実に何某かの色名を出して色彩について述べている部分について検討してみたい。

最初に色彩に関する記述が現れてくるのは、上巻の堀河帝の死の直後である。更に驚くことに、上巻にでは色彩に関する記述は後にも先にもこれ一例しか登場しない。では、衣装の方はということになると、こちらは全く見ていないということはないようである。

何度も殿や大臣殿が病床の堀河帝の元を訪れていることは、彼女の記述からも分かる。その中でも、

「あまり護摩こそおびたたしくさぶらへ」と申し給へば、

「これはいかにいふぞ。かばかりになりたることをば」と仰せらるれば、御直衣の袖を顔に押し当てて立ち給ひぬ。（三）

とあるように、大殿が直衣姿であったことも記録している。また、戒を受ける堀河帝に関しても、直衣を取って来るように命ぜられた後、

御冠など持ちて参りたれば、するかせぬかの程に押し入れて、御直衣、引きかけてまゐらせたる、御紐、「差さむ」とおぼしめしたるなめり……（一〇）

とあるように、帝が直衣を着用したこと、その玉を上手く紐に通すことができないことなどを観察している。

堀河帝の元を訪れる大殿が直衣を着ていたこと、堀河帝が直衣を着ようとしたことは書かれているのに、それが何色であったのかについては全く触れられていない。また、上巻中では共に看病を続けた乳母達の衣装に関しても何一つ触れられてはいないし、見舞いに来た中宮の衣装についても触れられていない。

上巻で登場する唯一色彩を持って登場する服装の例は、

御障子より投げ入れらるるものを、「何ぞ」と見れば、わが局に置きたる二藍の唐衣被きたるもの投げ入れて、人のゐるを見れば、藤三位殿の「かく」と聞きて、参り給へるなりけり。（一四）

だけである。なぜここにだけ、唐突に色彩表現があらわれたのかについては、この部分が堀河帝の看取りの、最後の部分に来ていることに注目しなくてはならない。

堀河帝の死の直前には「私」は、

……ただひとつにまとはれて、僧正・三位殿二人・御前・わが身、五人の人々、ひとつにまとはれ合ひたり。（一三）

と、極端に狭い視野を持っていたが、堀河帝の死と同時に急速に広くなり、僧正の退出より後、

大弐三位「あな、悲しや。いかにしなし出でさせ給ひぬるぞ。助けさせ給へ」と、声も惜しまず泣き給ふを聞きて、さながら泣き響き合ひたり。左衛門督・権中納言・大臣殿の権中納言・中将・御乳母子の君たち、十余人、女房のさぶらふかあぎり、声をととのへて、せめておぼゆるままに御障子をなゐなどのやうにかはかはと引き鳴らして、泣き合ひたるおびたたしさ、もの怖ぢせむ人は、聞くべきもなし。（一四）

と、実はその場には多くの人がいたことや、それらの人々の愁嘆の様子を具に語り始める。それらの様子を見つめながら、自分と乳母達を比較し、

『あの人たちの思ひまゐらせらるらむにも劣らず思ひまゐらす』と、年頃は思ひつれど、なほ劣りけるにや、あれらのやうに声たてられぬは」とぞ思ひ知らるる。（一四）

とただそこに座り続けているだけの自分を見出すことになる。この分析は極めて冷静なようにも見えるが、堀河帝の死を自分のものとして受け入れられていないショック状態の方が大きいと見るべきだ。死を自身の中に受け止めきれていないがゆえに、冷静に周囲を見る彼女の視界に飛び込んできたものが、「二藍」という色であったのだろう。

それまで何色をも描かれてこなかった中に急に色彩が飛び込んで来た意味は大きいのではないだろうか。それは、堀河帝の死と共に急速に広がる視界ということと無関係ではないだろう。それまで何色も興味を惹かずに看病に没入してきた彼女が、堀河帝の死をもって初めて色彩認識する。この「二藍」という色に気がついた冷静さもまた、彼女のショックの大きさを物語るものではないだろうか。

下巻も基本的には無彩色のままである。堀河帝の服喪にこだわる彼女の下巻で最初の色彩は

乾く間もなき墨染めの袂かなあはれ昔の形見と思ふに（一六）

と黒から始まる。

その後、色彩の記述が出てくるのは、堀河帝の月命日に向かう部分であり、ここで現れる色彩は白である。

道の程、まことに堪へ難げに雪降る。車の内に降り入りて、雑色・牛飼ひ、みな頭白くなりにたり。牛の背中も白き牛になりにたり。（一八）

無彩色の世界に色が戻ってくるのは鳥羽帝の即位の儀当日である。

ほのぼのと明けはなるる程に、瓦屋どもの棟、かすみわたりてあるを見るに、昔、内裏へ参りしに、過ぎざまに見えし程など、思ひ出でられて、つくづくとながむるに、北の門より、長櫃に、褌着たる者ども、蘇芳の濃き・打ちたる黄白の出だし衣入れて、持て続きたる、別におもしろく見ゆるべきことならねど、所がらにや、めでたし。（一九）

「昔、内裏へ参りし」時に思いをはせていた彼女の意識を戻したのは北の門より来た「褌着たる者ども」の持っていたものである。「別におもしろく見ゆるべきこと」ではないと言いながらも、日記にそのことを記述し、他に「いみじく心殊に思ひ合ひたるけしきども」もあったのに、そのことについては「われは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて」いたと述べている。この「いみじく心殊に思ひ合ひたるけしきども」については何も言わず、「別におもしろく見ゆるべき」ではないことに、「所がらにや、めでたし」と述べていることにも注目しておかなくてはならない。

鳥羽帝に再出仕をした彼女の周囲の彩りも無彩色で始まる。嘉承三年正月一日に彼女が内裏に参上したのは夕方であり、その日は

朔日の日の夕さりぞ参り着きて、陣入るるより、昔思出でられて、かきくらさるる。局に行き着きて見れば、異所に渡るらせ給ひたる心地して、その夜は、何となくて明けぬ。(二〇)

とあるように、昔を思い出したまま夜を迎える。翌朝は「雪、いみじく降りたり」とある。「昼は、はしたなき心地して、暮れてぞ上る。」とあるように、実際に鳥羽帝の元に参上したのは暮れてからである。鳥羽帝の給仕に就く彼女は、

御台のいと黒らかなる、合器なくて、土器にてあるぞ見慣らはぬ心地する。(二〇)

とあるように、その台盤が黒いことに着目している。さらにその翌朝改めて見た部屋のしつらえも、

明けぬれば、みな人々起きなどして、見れば、御前の御簾、いとおびたたしげなる葦とかいふもの、懸けられたり。縁は鈍色なり。御障子の御几帳、同じ色の御几帳の手白きなり。(二一)

と無彩色のままである。

次に色彩がたち現われてくるのは、堀河帝の諒闇あけである。

殿を始めて、殿上人・蔵人、御装束更へ、纓おろし、女房たちの姿、われもわれもといろいろ尽くし合はれたる様ぞ、ただ降りけむ心地してぞ、並みゐられたる、水無月頃に引換へて、珍しき心地する。(二九)

諒闇あけの華やかな様子が描かれているのだが、ここでも、誰がどのような色彩の物を着ていたのかについては書かれていない。ただ、彼女の関心を引いたのは、

釵子・元結は白かりつる、「例のやうに斑濃になされむ」とて、いとなみ合はれたり。（二九）

という釵子・元結の色である。多くの人達の華やかな衣装ではなく、斑濃の釵子・元結という小さなものの方に心惹かれたということにも注目しておきたい。また、それに注目したのは「例のやうに」と堀河帝の死以前の状態を思うが故であることも、確認しておく必要があるだろう。

その後、彼女は「うるはしく装束きて参らせ」た殿と鳥羽帝に「うつくしげ」に引直衣を着せるのだが、これもまた何色であったのかは不明である。

大嘗会の日に

その日になりて、播磨守長実、御角髪に参りたり。内大臣殿、朝餉の御簾巻き上げて、長押の上に殿さぶらはせ給ふ。縁に左衛門佐、いと赤らかなる袍着て、こと掟てて、暫しありて、御角髪果て方になりて、蔵人参り……（三四）

という記述がある。左衛門佐こと藤原顕隆は当時正五位なので浅緋色の袍を着ていたのだろう。他に播磨守・内大臣殿・殿もその場には存在しているのに、なぜか彼女は左衛門佐の服装だけを記述している。また、

みな人たち、小忌の姿にて、赤紐かけ、日陰の糸など、なまめかしく見ゆるに、挿頭の花の有様見る、臨時祭見る心地する。（三九）

という部分でも、五節で小忌姿の者たちのつけている赤い紐に心を惹かれている。

そして、鳥羽帝との五節の長橋造営見学から堀河帝との雪の朝の回想へと移る。「雪の朝」でありながら、紅葉襲を着用していることに対する疑問点は長く言われている所ではあるが、その疑問は一旦置いておく。この部分から次の段にかけては『讃岐典侍日記』中最も多くの色彩が現れる部分である。

……五節の折着たりし、黄なるより紅までにほひたりし紅葉どもに、葡萄染の唐衣とかや着たりし、わが着たるものの色合ひ、雪のにほひにけざけざとこそめでたきに、頓にもえ入らせ給はで御覧ぜしに……（三六）

続く出衣の場面もやはり、色彩が登場する。

皇后宮の御方、常よりは心異に、細殿の几帳などにも、織物の三重の几帳に菊の結びなどして、袖口、菊、紅葉、

いろいろにこぼし出だされたりしかば、（中略）みな人の袖口も龍胆なるに、わが唐衣の赤色にてさへありしかば、ひとり混じりたらむが怪しきおぼえて……（三七）

この二か所の、最も色彩が多く表れている所に共通することは何だろうか。双方に共通しているのは堀河帝が「私」の衣装に注目をしたという事象である。

この後、清暑堂神楽では「盛りなる桜の花の咲きととのほりたらむを見る心地す」と評される殿であるが、どのような衣装であったのかについては一切触れられていない。この後、再び無彩色の世界へと戻り、

……「香隆寺に参る」とて、見れば、木々の梢ももみじにけり。外よりは色深く見ゆれば、

いにしへを恋ふる涙の染むればや紅葉の色も殊に見ゆらむ

御墓に参りたるに、尾花の末白くなりて、招き立ちて見ゆるが、所がら、盛りなるよりも、かかるしもあはれなり。（四二）

と薄の白さが述べられるだけである。

三六段・三七段の部分は他と比較しても軍を抜いて色彩表現が多いが、もしかすると色そのものは、作品世界では大きな意味を持たないのかもしれない。

作品全体を通して、堀河帝が「私」にしてくれたことに関する彼女の思いが占める割合は大きい。そのことによって、彼女が作品中で何を重視していたのかということが良く分かる。

一例として、『讃岐典侍日記』中三度登場する、堀河帝が自分の膝で他の人達から自分が見えるのを隠してくれたと述べる場面に共通していることを考えてみよう。この堀河帝による膝隠しは「私」に強い印象を与えたことであったらしい。実際には同様の内容のことが何度もあったのか、一度しか無かったことを彼女が何度もリフレインしているのか、日記内の記述からだけでは推し量ることはできないが、「何度も書く」ということそのものから、この一件は、彼女の印象に強く残ったことであるのは間違いない。

大殿、近く参らせ給へば、御膝高くなして、陰に隠させ給へば、われも、単衣を引き被きて、……（五）

例ならでおはしまいし折など、御かたはらに添ひ臥させ給へりし折りに参りたりしかば、御膝高くなさせ給ひて、陰に隠させ給ひし折、『かやうならむことども』をこそ思はざりしか。（一一）

……殿の後の方に寄り奉らせ給ひしかば、そのままにてさぶらはむは、なめげに見苦しくおぼえしかば、起き上がりて退かむとせしを、『見えまゐらせじ』と思ふなめり」とおぼして、「ただあれ。几帳つくり出でむ」とて、御膝を高くなして、陰に隠させ給へりし御心のありがたさ、今の心地す。（三一）

これらの記述のどこからも、堀河帝の衣類や彼女が「引き被」いていた単衣の色などは分からない。このことは、彼女にとって重要だったことが堀河帝が「私」を膝で隠してくれたという「行為」であり、その他の事に関しては一切興味が向いていないということを意味している。

「雪の朝」や「出衣」の場面は、実は衣の色が大事なのではない可能性が高い。重要なことは、堀河帝が「私」の衣装（を着た姿）を評価してくれたという「行為」の方であろう。「何を」評価してくれたのかということは、目的語的に必要になるだけであり、必然的に評価してくれたものの詳細を書かなければならなかったに過ぎない。それが何色であったかということが重要だったのではなく、「評価された」というできごとそのものが重要であったのだと考えるべきである。

ところで、数少ない色彩表現ではあるが、この『讃岐典侍日記』にはある特徴がある。白・黒という無彩色を別にすると、彼女が興味関心を惹かれる色には、ある共通項があるのだ。彼女の色彩表現は赤・紫系統の色に傾斜をしている。

鳥羽帝を案内して歩く途中、前栽を眺め「御覧ぜましかば、いかにめでさせ給はまし」と堀河帝の事を回想するが、その時に彼女の目を惹いたのも、色の濃い萩であった。

御溝水の流れに並み立てるいろいろの花ども、いとめでたき中にも、萩の色濃き、咲き乱れて、朝の露玉と貫き、夕の風靡くけしき、殊に見ゆ。（三二）

これだけ色彩の少ない日記の中で、赤・紫色系統の色だけが突出して多く登場するということは、どうやら彼女にとって赤・紫という色は、目を惹く色であったということなのではないだろうか。

服飾や色彩に関して、この数少ない色彩表現を鑑みると、嫌いであったから目を惹くということはないだろうから、あるいは、赤・紫色系統の色は彼女の好みの色でもあったのかもしれない。

○

紫式部にとっては色彩や服装は、自身の興味対象であったばかりでなく、他者を批評するための指針の一つであったと言える。他者への批評は自己への内省へと繋がることを考え

ると、紫式部にとって、自己の興味以上に色彩や服飾は切り離して考えることができないものだ。

一方讃岐典侍はその作品中のほとんどに色彩や服飾の記述が登場しない。それは、彼女自身がその分野に興味がないことの現れでもあるが、同時に作品世界そのものが色彩を必要としない構造を持っているからではないだろうか。

日記全体を貫いているのは基本的には無彩色の世界だ。いや、正確に言えば色が描かれない世界である。そのことそのものは、彼女自身関心がなかったことを意味するのと同時に、彼女が必要としなかったことの現れに他ならないだろう。衣装のみならず、色彩そのものも彼女の関心を惹かないということは、彼女にとってそれがあまり意味をなさないものであったからだ。

彼女のとって重要視すべきは、「誰が」「何をしたか」という行為の部分である。誰かが「私」にしてくれたこと、「私」が誰かにしてあげたこと、そして、それらの事に対し批評・評価を加えず、「私」にとって無害な人々の有様で全てである。その意味において「私」は極めて閉じた世界を生きていると言えるだろう。

上巻における看取りの記はその内容的にも場所的にも極一部分の場所・場面のみで構成されている。下巻もまた、彼女の置かれている「今」は全て堀河帝との（あるいは堀河帝との）思い出へと集約されていく。突き詰めて言えば、『讃岐典侍日記』は上巻も下巻も「私」と堀河帝の思い出のみで構成される、極めて閉じた世界でできあがった日記であると言えよう。この閉じた世界は特に色彩を必要としない。そのようなものがなくても、「事柄」さえあれば、十分に世界は成り立ってしまうからだ。彼女にとって色彩は興味を惹かないものであると同時に、彼女の作品世界にとっては不必要なものであったのではないだろうか。必要なものは、堀河帝の思い出とそこに付属する事象という閉じた世界には、彩りは無用なのだ。

［注］

① 小谷野純一　『讃岐典侍日記への視界』　新典社　二〇一一年八月

② 新日本古典文学体系一九　『源氏物語　一』　岩波書店　一九九三年一月

③ 小谷野純一　『紫式部日記』　笠間書院　二〇〇八年六月改訂版

④ 新日本古典文学体系二〇　『源氏物語　二』　岩波書店　一九九四年一月

⑤ ③に同じ

⑥ ③に同じ

⑦ ③に同じ

『讃岐典侍日記』本文の引用に際しては、小谷野純一編『校注讃岐典侍日記』新典社　一九九七年四月を使用し、傍線・太字は著者が付しました。